

随想



旅と観光

宮川 港

「海行かば……」のヴェールを脱いだ九十九島の静かなたざまいに感嘆しながら、濃緑の島々と清冽な海を交互に見つめていた。

戦乱、激動の時代のこの海は、あらゆるものを海底のくもずとして呑みこみ、幾十年も密閉されたままであった。軍港

要塞にまつわる幾多の日の目をみることでできなかつた物語を、いま奏でているのである。この潮騒には、どんなに悲しい音曲も及ばない迫真力がある。また、限らない紺碧の色は、呪われ狂った過去の日本の悪夢を現わす極彩なのかも知れない。船底を誰かがたたくような無気味な感触さえ覚え、とても落ちついた気分にはなっておれなかつた。

西海国立公園、九十九島巡りのコバルト号は、そんな私を乗せて鹿子前港にすべり込む。造成された広い緑地帯にバスターミナルがあり、その左に和風の茶店がある。そこに、明るいオレンジ色のユニフォーム姿の若い女性が数人、佐世保市観光課のマークをつけて、下船した私たちを待っていた。

まだ、船旅の余情が鮮烈に残っている私にも近寄ってきて、観光パンフレットを配りながら質問をはじめた。

どういう経路で鹿子前に来たか、佐世保市で観光する予定があるのか、旅行の目的は、これからどちらへ、などと要領よく、つぎつぎに問いかけてくる。

この地方を調べてもらおうという市の熱意から派遣されている観光調査員なのである。観光客にその存在を問いかけて、注意力を引こうという商魂でもあるわけで、市の観光知名度をはかるうえでも、また、素通り防止策をとるためにも、有用なことなのである。とにかく、地

道な努力が払われていることに、私は、はっと虚を衝かれた思いであった。観光とは、旅とは、一体何なのである。と、熊本に向かう列車の中で考える。人は交通機関を利用して旅をし、その道すがらも楽しく、目的地についたのち、いろいろな風物を見聞して回ることも、宿でのくつろぎ、さんざめくくなかの歓談が、心をなごませてくれることなど、ひとときの幸せに浸ることができ

る。勿論、ひとくちに旅・観光といっても雑多であるが、今日の観光旅行は春秋を問わず、年中行事のパターンとして折り込まれていて、生活にすっかり根を下したものと なっている。昔のお伊勢参りや、ご本山参りなどのように、一生一度のしかも決死的な大事業ではなくなっているのである。日常茶飯事として外国旅行などもやってくるのができる。

ところが、このとめどもない流出の果て、自然や人間の破壊にまでいたり、観光という言葉さえ薄汚れてしまったが、それでも、なおかつ人間は旅先で、ふるさとを感じたり、ちょっぴり異国情緒に浸ったり、命の自浄という大義名分を振りかざして、浅く深く自然とかかわり、人間と触れ合いながら、これからも、人生のフィルムを一枚一枚綴り合わせてゆくことであろう。

(了)
(文芸八代同人)

れた湖の方が、葦原はふさわしいと思いつつながら、昏れてゆく琵琶湖のさざ波をたのしんだ。

熊本に帰って、熊本の橋を調べる仕事にぶつかった。明十橋と明八橋はめぐね橋で少しは世に知られた橋である。明十橋は東唐人町と塩屋町を、明八橋は西唐人町と新町を、それぞれにつなぐ坪井川の橋である。石工の橋本勘五郎は、宮城の二重橋や万世橋を架けたがね橋の専門家である。彼がそれ程の仕事をして、熊本へ帰った揚句の、明八、明十橋ということは、あまり世間には知られていない。昔の人は知っていても、当今、ナハンを駆って走りまわる人々には思いもかけぬ程の小さな橋である。現に、明八橋の横にある派出所前の案内図には、白川はかきこんであつても目の前の坪井川は書いてないという手軽さである。

私は明八橋の上に立って、少し石ぐみのゆるんだ橋梁をのぞいた。明治八年からの石が、がっちり坪井川の水にふみこんで、まだまだ大丈夫の顔つきであった。お天気つぎで水は少ないけれど、商家の裏座敷が川に臨んで、実にいい眺めである。これを壊されてはかなわぬと真底思った。難波江の葦は知らず、坪井川のこのあたりは、たとえ小さくても、屈折していても、川にとつてのメーンである。さて、そういつて一人で力んでみて世の移り変わりがどうなるものか。だが明治三十三年の大洪水で、長六

橋が流失しても明八橋は残った。この辺りは白川の氾濫で水びたしになったのである。めがね橋の強さであろう。私は九品寺の住人だから、大甲橋を朝夕に渡る。これは近代的な無脚の橋である。だが岸辺にはまだ高官が茂り、葦もそよぐ。犬が走り、鳥も来る。かたわらに人が生き、ものが育つてこそこの川だと思ふ。初期的な気分が、どこまで維持できるのか、秋川に架る無脚の橋を渡りながら、つくづくと思うのだ。

(現代歌人協会会員)

舞台裏

— 地方文化の灯火 —

菩提 哲哉

「いいなあー、音楽を聞いたり、よい芝居を見たり、うらやましいぞ云々」と、友人や先輩からよくからかわれる。しかし、管理・運営する立場からすると、それなりの労苦が伴うのをご存知ないらしい。そこで、舞台裏をよくのぞいて頂くことにしたい。— 宇土市人口三万

二千、市民会館設置されて五年目、教育庁の同僚先輩から「とうとう行くか」と言われ、誘いのつた次第。貸しホールに甘んじては、公立文化施設の名がすたるので、会館独自、つまり自主事業の姿勢をとり、年に二十回位、伝統芸術の歌舞伎、文楽、能・狂言、邦舞から、音楽劇、交響楽、バレエ、新劇、そして大衆芸能の浪曲や万才・寄席、そして児童劇と、幅広いジャンルと取り組んでいる。

だが、音楽会に同伴のことものおしゃべりがウルサイ！開演途中の入場者の規制をドアマンを置けとか、館内管理の不備を叱られる。舞台上勤務する職員は大別して、吊物舞台を操作する舞台係、音響係、照明係りの三つだが、小館は一人づつ配置で、使用者の監督と打合わせ、秒刻みと細心の注意を払いながら、食事も取る暇もない時が多く、せまい場所での不快、不健康な勤務であり、急病を起こされると補充も全くなく、劇団関係者からは施設・設備の不備さと不備、機械器具の老朽などを指摘されることもある。

やはり思い切って十年位先を見越した、設計・設備などが望まれるのだ。それに、もう今はないが、何とかして入れろ！招待券を出せ！出さぬなら入口に葬式の花輪を並べてやるぞ(葬式はこっちが専門だ)。とかの嫌がらせの電話

秋の川

安永 啓子

十月の終わり、京都から金沢へ旅をした。昼間のことだから大阪から京都の辺りでは、難波江の葦が見えると、心だのみにしていたのが見事に裏切られた。どの河も、眩しいばかりの護岸工事が施されて、まっ白な石積のどの辺りにも、葦の姿は見ることは出来なかつた。

芦原は雨の日は凄まじく悲しく、曇りの日は不気味な戦々を見せ、晴れの日には鋭い葉先がかけりあう美しさにきらめいて、さまざまに興味をそそるものだ。それがあとかたもなくなくなって、失望は大きかつた。

京都駅から、「雷鳥」にのりこんで、黄昏れの北陸路へ向かった。思いがけないことであつたが、琵琶湖のほとりにさしかかった時、湖の岸をふちどる様に茂る葦原を見た。先の失望が大きかつただけに、やさしい眉の様な、まつげの様な黒い葦はことの他美しく見えた。都はな

が夜中でもかかってくる、どうして来たのか、何のために、と、情けなく思った事もある。こんな時には、全国公立ホール六百館の仲間も、多かれ少なかれこんなめにあつているのだ、これも、地方文化振興のためだと、自分で慰めてきた。然し、終わって、感動して帰る方々の顔、またせび呼んで下さい、と握手を求められる時が、幸せの瞬間である。また、出演者の方々からも、いろいろと教わることもある。松竹の片岡仁左衛門さん、雁治郎さん等からは、舞台の役柄を通しての人間形成や、この世界の親子の縁しもままならぬ雲のきびしさ。音楽の指揮者朝比奈さんのお人柄、「道」に徹する心構え等々。生涯教育の見地より見逃せない事実である。

数多くの劇団や、アーティスト達の来館に、秀いでた劇団ほど、楽屋・控室の後始末が立派である。なかには汚れた靴下から、パンティまで忘れていくのがあつた。花道から出ていく時に、必ず両手で合掌して出ていくのが杉村春子さん、その姿に、またうしろから拝む私でもある。演ずる人、観る人、共に働く舞台裏の人たちに至るまで、無事円成してほしいとの、心からの祈りでもある。そして、地方文化を絶やす事なく掘り起こす意欲への願いでもあるのだが。

(宇土市民会館長)